

【子規派の画人・為山】

明治二十七年、為山らは帰松した際に、松山の俳句結社「松風会」^{しょうふうかい}の発足にあたり俳句の指導を行っています。またこの頃、子規の句会にも熱心に参加し、次第に洋画から日本画へ転向していきました。明治三十年に松山で発刊された子規派の俳誌「ほとゝぎす」の創刊号で、表紙の題字を手掛け、それ以降、子規派の句集『新俳句』への挿絵を描くなど、為山は子規派の画人として知られてゆきました。

明治三十七年には、松山市正宗寺の子規居士埋髪塔落成式に出席しましたが、その埋髪塔の子規肖像画は為山が描いたものでした。



為山画「松風会会員図」

(松山市立子規記念博物館所蔵)

明治四十四年には、松山市制二十年を記念した市章をデザインし、同年四月十七日に制定されました。

為山の画報・デザイン

(掲載資料は、「松山市市章」以外はすべて松山市立子規記念博物館所蔵)

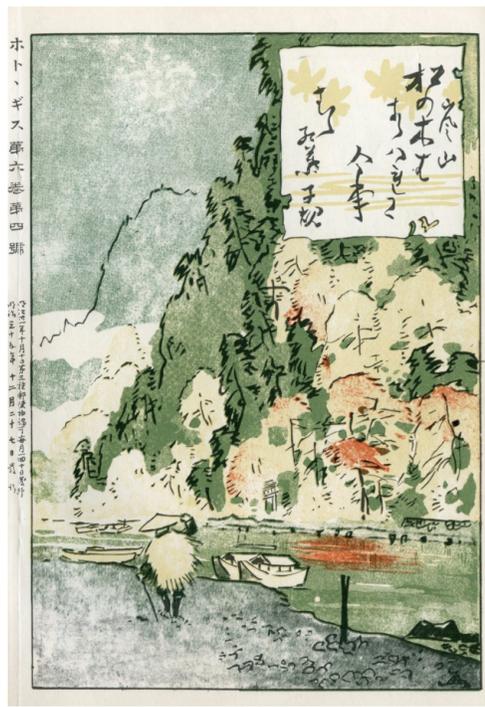


「ホトトギス」7巻12号為山画

「松山城北練兵場バラックに於る俘虜軽傷病者室」



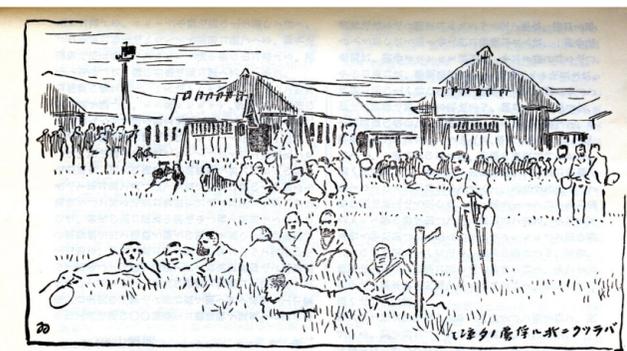
「ホトトギス」7巻1号



「ホトトギス」6巻4号



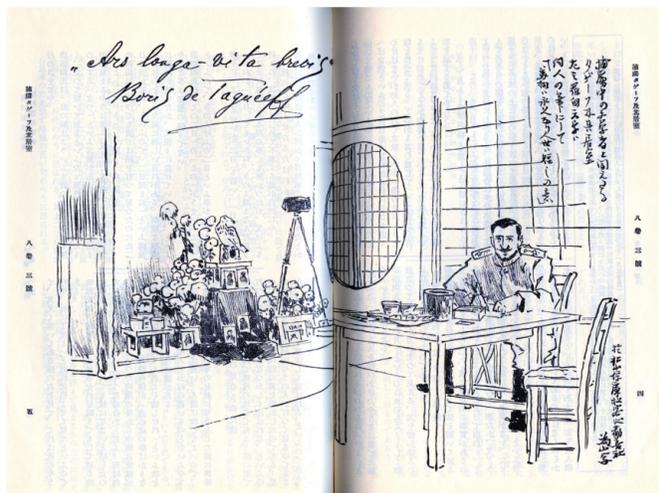
夕涼み外バラック



夕涼み外バラック

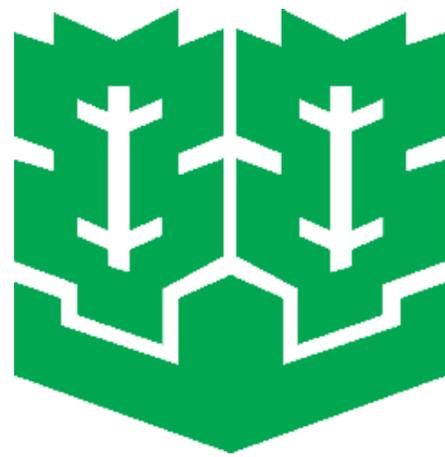
「ホトトギス」8巻1号

為山画「バラックに於る俘虜の夕涼み」ほか



「ホトトギス」8巻3号

為山画「捕虜タゲーフ及其居室」



松山市市章

松と山を図案化して

「松山」を表現したもの。

【市井の一俳画人として終焉】

為山略年表

洋画を目指した頃、ライバルであった中村不折が、帝國美術員会員となったのは対照的に、為山は、東京や大阪、松山など各地を転々とし、日本画の修行に明け暮れ、市井の一俳画人として、昭和二十四年、疎開先の富山県にてその生涯を終えました。



容づくる鏡小さし春寒み 為山画賛「椿雀」

(松山市立子規記念博物館所蔵)



為山画「緋桃」

(松山市立子規記念博物館所蔵)



為山画「青梅」

(松山市立子規記念博物館所蔵)

参考文献

「まつやま 彩時記」松山市文化協会 平成十八年三月三十一日発行
 「きらめき 2015 春号」Vol.84 松山市文化協会 平成二十七年四月発行

元号	西暦	年齢	年月日
慶応元年	1865	0	5月21日、松山藩士下村純嗣、ミネの次男として現在の松山市三番町で生まれる。
慶応3年	1867	2	子規が生まれる。
明治8年	1875	10	この頃漢詩を習う。
明治15年	1882	17	上京。漢学塾「紹成書院」に入る。本多錦吉郎の洋画塾「彰枝堂」に入り洋画を学ぶ。講師に小山正太郎や浅井忠がいた。
明治18年	1885	20	松山市二番町にある二神家の養子となる。
明治20年	1887	22	小山正太郎の洋画塾「不同舎」に転じて洋画を学ぶ。このとき同門として中村不折がおり、小山門下の双壁と称される。
明治22年	1889	24	明治美術会第一回展に作品を出品。
明治23年	1890	25	第三回内国勲業博覧会に「慈悲者殺生」を出品し、褒賞を得る。この頃、従兄の内藤鳴雪を常盤会寄宿舎に訪問し、子規を知って俳句をはじめ。また、子規と邦画・西洋画の優劣を論じ合い、子規に西洋画について開眼させる。
明治26年	1893	28	この頃、牛伴（ぎゅうはん）を俳号のひとつとし、以降子規たちとしばしば句会を行う。
明治27年	1894	29	子規から新聞「小日本」の挿絵を頼まれるが、これを断ったため、同紙の挿画は主として中村不折が担当する。帰松し、松山の子規派俳句結社「松風会」を指導する。
明治28年	1895	30	「松風会」が開催した子規の従軍壮行会に出席。旧姓の下村に戻る。上京。
明治30年	1897	32	柳原極堂が俳誌「ほとゝぎす」を発刊し、その題字、挿絵を書く。第一回蕪村忌に参加する。
明治33年	1900	35	パリに留学する浅井忠の送別会に参加し、その時の絵を描く。
明治35年	1902	37	東京を離れて大阪に住んだ後、西条市に仮寓。子規没する。
明治36年	1903	38	帰松、以降数年間県内東中予地方を転々とする。
明治43年	1910	45	虚子と伊豆・熱海に遊ぶ。また碧梧桐・霽月・三好淡紅らと郡中彩浜館に遊ぶ。
明治44年	1911	46	松山市の市章をデザインする。（4月7日制定）
明治45年	1912	47	千葉県流山の山崎屋に仮寓。
大正2年	1913	48	本郷区台町鵬明館へ転居。
大正3年	1914	49	軽い脳溢血をおこし、右手に後遺症を残す。旅行ができなくなったため、風景画をあきらむ。
大正4年	1915	50	小石川区白山御殿町128にはじめて家を持つ。
大正6年	1917	52	「書画之研究」創刊号に「俳画の生命」と題する画論を発表する。
大正7年	1918	53	芥川龍之介が「ホトトギス」に発表した「俳画展覧会を觀て」と題する文章のなかで為山の画に触れる。
大正15年	1926	61	この頃から谷口徹夫（緑山）が為山に師事する。
昭和2年	1927	62	本郷区弓町一丁目29に転居。
昭和3年	1928	63	平凡社版『世界美術全集』第30巻に、為山の油彩画「慈悲者殺生」が掲載される。
昭和7年	1932	67	本郷区西片町10番地イの18に転居。柳原極堂の創刊した俳誌「鶏頭」の題字、表紙絵を描く。
昭和8年	1933	68	小石川区白山御殿町107に転居。
昭和11年	1936	71	この頃書の揮毫依頼をよく受ける。
昭和13年	1938	73	小石川区白山御殿町110に転居。
昭和18年	1943	78	柳原極堂著『友人子規』の表紙絵を描く。
昭和20年	1945	80	長野県上水穴群古間村水穴、棚橋一郎方へ疎開。東京大空襲で自宅焼失。富山県東砺波郡北山田村梅原、井口仁志方へ移転。棟方志功との二人展開催。帰京の決意をするが、交通事情が悪く駅前の寺に泊まる。
昭和21年	1946	81	富山県石黒村和泉（現福光町和泉）に転居。
昭和22年	1947	82	半身不随となり臥床。
昭和24年	1949	84	病床を訪れた孫の二神恒康に左手で左右対称に書いた絶筆「下村為山」を手渡す。富山県西砺波郡石黒村和泉1386番地で午後6時30分没す。